ユートピア展望
－ユートピアの原点、そして現在から未来へ－

長　江　弘　晃[※1]
星　　昇次郎[※2]

Abstract:

This paper is written by the following content.

1. Look to starting point of utopia.
2. Viewpoint to utopia.
3. Utopia that gropes.
4. For the utopia of the 21st century.

In the feature of the thesis, the first is a re-interpretation of "Utopia" of Thomas More. The second is an essay of the coordinate axis of the utopia. The third is an introduction of the work concerning a modern utopia. The fourth is a presentation of a social image that overcomes the dystopia for the construction of the utopia of the future.

キーワード：

ユートピア、ディストピア、トマス・モア、ホモ・ソムニエンス、20 世紀ユートピア作品

はじめに

ユートピアは近世初期のヨーロッパで生まれた政治的・文学的な産物であるが、この語は今日でも多くの人々により、ある場面では肯定的に、また、ある場面では否定的な意味合いで、頻繁に使用されている。そこでこの小論では、まず、トマス・モアのユートピアに焦点を当て、ユートピアの構造や特徴を整理してみる。モアのユートピアは、後の様々なユートピア作品の原点と考えられるからである。次に、現代の代表的なユートピア論すなわちユートピアへのアプローチについて考察する。さらに、20 世紀の代表的なユートピア諸作品に焦点を当て、その特徴や傾向を探る。このような作業を通して、21 世紀のユートピアへの展望に迫り、ユートピアに未来はあるのか考えてみようとするものである。

1．ユートピアの原点へのまなざし

(1)　夢を見るヒト

古来より、人間とは何であるかという問、人間の「本質」への問が人間自身によって問いかけられてきた。その答えとして、「ホモ・サピエンス(賢いヒト、理性をもつヒト)」、「ホモ・ルーデンス（遊ぶヒト)」、「ゾーオン・ポリティコン（ポリス的動物)」、などがその代表的な表現である。人間の「本質」を表す言葉として、「ホモ・○○」という表現が、これまでに多くの先達によって打ち出されて

※1 佐野短期大学　総合キャリア教育学科（旧社会福祉学科）　※2 栃木県立宇都宮北高等学校

きた[1]。屋上屋を重ねることになるが、筆者は「ホモ・ソムニエンス（“Homo somniens”、夢見るヒト）」という表現を提案したい。「ソムニエンス」はラテン語のsomnio（夢を見る）に由来し、「ホモ・ソムニエンス」とは、人間や社会について、眼前の現実とは別のあり方を夢想する点に人間の「本質」を見ようとするものである。[2]

ここで、夢の語義に注目するなら、次の五つの意味がある。第一は、睡眠中に見る幻覚であり、いわゆるレム睡眠時に何らかの映像化・視覚化された形で意識に上り、覚醒時に覚えている夢である。第二は、頼りなくはかない思い、すなわち現実的に実体のない無常を感ずるまぼろしの夢である。第三は空想的な願望の夢であるが、心に迷いを生じさせる夢である。第四は将来実現したい目標や希望を表す夢である。「私の将来の夢は○○です」などと言う時の夢であり、これはある程度具体的なイメージの形をとるものであり、そこへ到達するための方法や手順が想定される。さらに第五は、かくありたい社会像・人間像を文字どおり夢見る時の夢である。そこには、たんなる願望や夢想という比較的単純な夢から、これから取り上げようとするユートピア作品などで展開される具体的な社会構想、作者が生きる社会とは別の、綿密に計画された望ましい国家・社会構成の形で示される夢まで幅広い段階がある。要するに、架空の理想国・幸福国（理想社会・幸福社会）へのホモ・ソムニエンスの描く強い願望を内包した夢である[3]。

続いては、様々なユートピア作品やユートピア思想の原点である、トマス・モアの『ユートピア』を再度検討してみたい。

(2)　モアのユートピア

①『ユートピア』概説

「ユートピア」はトマス・モアの造語であり、ギリシア語の否定詞ウと場所を意味するトポスとを結びつけた語であり、英語ではnowhereつまり「どこにもない場所」の謂いである。「ユートピア」の別表現として、モアは、「ウデポティア」（ギリシア語のウデポテすなわち「（時間的に）決してないところの意」、「エウトピア」（ギリシア語のエウ（福楽）とトポスとを結びつけた造語で楽園の意）などを考えていた。モアは初め、ユートピアでなく「ヌスクアマ」（Nusquama、プラトンの『国家』に出て来る語「ウダム」のラテン語化名）を考えていたという。「ユートピア」の語義には初めから「ありえないこと」、存在不可能性が含まれており、その語自体が人工的な造語であることを指摘しておきたい。[4]

次に、作品『ユートピア』の構成について記しておく。『ユートピア』は、アメリゴ・ヴェスプッチの航海に参加したラファエル・ヒュトロダエウスという人物（ヒュトロダエウスはギリシア語から取られたモアの命名になる人物で「馬鹿話の大家」というほどの意、探検家というべきか）が「新大陸」アメリカなどで見聞したことども、とりわけ五年以上もそこで暮らしたユートピア島（イギリスと同じ島国！）のありさまを、モアとその友人ペーター・ヒレスに語って聞かせる、という構成を採る。

『ユートピア』は二つの部分から成る。第一巻は「社会の最善政体について」の三人の対話である。対話は、モアが世話になったモートン大司教の参議会、フランス王の参議会、どこかの王の参議会へと仮想の場所を変えながら、モアが生きた現代における戦争、貧困、犯罪者の大量処罰、聖職者や政治に携わる者たちの堕落などの問題を話題にしながら展開される。第一巻は本論である第二巻への前提・導入の役割を果たしている。続く第二巻では、ヒュトロダエウスが見聞したユートピア国のありさまが詳細に語り出される。かいつまんでその特徴を述べるなら、次のようになる。

ユートピアは部族長や都市頭領らによって統治され、人々は農業ともう一つの職業を習得し、労働は一日6時間で済む。共同食事をとる習慣があり、老人への福祉が充実している。怠惰や貧富の差はなく、貧困はない。金銀が軽蔑され貨幣経済は消滅し、人々は余暇を学問に励む。一方、ユートピアは奴隷制社会である。刑罰に関する規定は簡素なもので、死刑や奴隷化刑がある。彼らは戦争を嫌うが、祖国防衛などのために戦争を行う場合は巧みなやり方によって勝利を得る、等々。このように、ユートピアは「完全な幸福」に近い状態が実現した社会と言えるであろう。モアのユートピアは、奴隷制という古代的な制度や家父長制という前近代的な要素と、人々（可能な限り多くの成員）の幸福・福祉の実現という近代的な理念とが併存する社会であると言える。[5)]

モアのユートピアを一つの貯水池にたとえてみよう。この貯水池に流れ込む幾つかの主要な潮流があると言える。それらの諸潮流がモアのユートピアという貯水池で新たな次元の社会構想として練り上げられ、そしてその貯水池から様々な流れが流れ出してきたと言える。そこで、次に、モアのユートピアという貯水池に流れ込む諸潮流にはどんなものがあったか、この貯水池で醸成された要素とはどんなものだったか、その泉（源泉）からどんな流れが流れ出てきたかを捉えてみることにしたい。

②モアのユートピアへ流れ込むもの

1）16世紀初めのイギリス社会や西ヨーロッパ世界における問題

上述した貧困の問題は深刻であった。羊毛生産の拡大をめざす地主層による「囲い込み」によって、多数の農民が土地を追われ浮浪し、都市へ流入するなどして犯罪の温床となり、当局はこれに厳罰をもって臨んだため処刑された者も多数に上った。「羊が人間を喰う」という痛烈な皮肉はよく知られている。イギリス、正式にはイングランド王国は、テューダー朝を開いたヘンリ7世と、その跡を継いだヘンリ8世の時代に強国へと発展してゆく。モアはこのヘンリ8世に重用され篤い信頼を受け、有能な法務官僚として大法官の地位にまで上り詰めたが、ヘンリ8世の離婚問題を機についには処刑された。また、絶対主義確立期の西ヨーロッパ各国は、勢力拡大をめざして競い合い、イタリア戦争（1494～1559）などを繰り広げ、平和は至る所で踏みにじられた。このような問題、ある意味での危機に遭遇し、これをどう打開するかがモアによって強く意識されていたであろう。[6)]

2）大航海時代

当時のヨーロッパは探検家たちが大西洋を渡ってアメリカ大陸に到達し、また、アフリカ南端を廻ってインド航路を開拓するなど、世界への積極的な進出が始まっていた。アメリゴ・ヴェスプッチの航海記が読まれるなど、人々の関心は未知の「新世界」へと拡がり、人々は好奇心をもってその動向に注視していた。「新大陸」の「発見」は、未知の世界にこと寄せて社会構想を語り出すにふさわしい設定をモアに与えた。異文化との接触はヨーロッパ人にとって新たな刺激であった。もっとも、ユートピアがどこにあるか、その正確な所在地は書き留められず不明のままとされているのであるが。実際には、ユートピアは、アメリカ先住民の社会・生活とは全く別な、ヨーロッパ的な社会として描き出された。[7)]

3）文化的・思想的要素

モアが生きた15～16世紀はちょうどイタリア・ルネサンスの最盛期であり、思想的には人文主義（ヒューマニズム）が盛んで、ギリシア・ローマの古典にもとづいて人間そのものを見つめ直そうという機運が高まった時代であった。モアも、当時の文化人の教養としてギリシア語・ラテン語に通じ、『ユートピア』もラテン語で著された。『ユートピア』の記述には、プラトンやらキケロやらの文人

たちの文献からの多数の引用が踏まえられている。また、この時代は宗教改革が始まった時代でもあったが、宗教的には、モアはローマ・カトリックの信仰に深く根ざした精神生活を送り、ヘンリ8世の離婚問題に際してもこの信仰に忠実であろうとしたと言えよう。モアの友人たちの多くも、古典とカトリックに根ざした活動をとり、エラスムスはその典型的人物であろう。

4）モアその人の個性

モアの祖父はロンドンの絹織商、モアの父はその組合の法律顧問であった。田村秀夫によれば、モア家は「富裕な商人階級と密接な関係のある司法官職の系譜を辿ることができる。」教育を受ける過程で、モアは12，3歳ころから14，5歳ころまで、当時の大法官・大司教であるジョン・モートンの邸に住み込み、修養を積む。モートンは人間味豊かな人で、モアは彼から薫陶を受けたばかりでなく、モートン家でときおり催される劇で役割を演じたという。この経験が、『ユートピア』第一巻のドラマ的構成に生かされていると考えられる。モアは実務に優れていて官僚の道を着実に上り詰め、ついには大法官に任命されたが、ユーモアと包容力のある人物であったとされる。ともあれ、上記のような幾つかの主要な要素が、モアという個性に統合されて、『ユートピア』が出来上がったことは間違いないであろう。

③モアのユートピアで問題にされたこと

『ユートピア』第二部で取り上げられた主な論点を七つに絞ってみたい。この論点は、後の様々なユートピア作品でも繰り返し取り上げられてきた。

1）戦争と平和

ユートピアでも戦争はあるが、武力を用いる戦争は犠牲が大きいため、戦争を回避する方策が取られる。回避できない場合でも、勝利するための方法に巧みである。16世紀初めにおける戦争は、今日のそれのように総力戦・殲滅戦（核戦争のような）という形態でなかったが、社会のあり方にとってまさに死活問題である。

2）貧困の解決

貧困にあえぐ多数の人々の存在が当時のイギリス社会を脅かしていた。ユートピアでは貧富の差は問題にならない。貨幣の廃止、金の軽蔑がその背景にある。ユートピアでは怠惰に陥ったり犯罪をおかしたりする一部の人々を除いて、成員の最低生活が保障されているように見える。

3）労働または職業

人々は農業と、もう一つの職業に携わることになっている。一日六時間労働で十分であり、怠惰と奢侈が注意深く避けられている。ユートピアの経済は農業、手工業中心であり、「足るを知る」経済であると言える。

4）法律と犯罪者の処罰

当時の社会では貧困のため犯罪に手を染める人々が多く、犯罪に対しては厳罰が待ち受けていた。これに対してユートピアでは、犯罪そのものの発生件数がきわめて少ないと同時に、犯罪者に対して教育刑的な扱いが重んじられる場合が一般的である。細部にわたる刑法はないが、死刑や奴隷刑はある。ユートピアでは強力な権力機関は存在しない。行政・刑事に関する制度は発達する必要がないと言える。

5）精神生活とりわけ学問・宗教の重視

ユートピアの住人は余暇を学問に使う。一般的には、人は金と暇があれば「遊び」に走るように思われるが、そうではない。ユートピア人の宗教は、キリスト教に近い、一種の理性宗教というべきものである。学問も宗教も、また、これに芸術を加えて、人間の精神生活を充実させうるものであろう。

6）共同体の維持と福祉の実現

ユートピアで行われる共同食事はプラトンの影響を受けたものと思われるが、現代のわれわれが考えるようなプライバシーの権利な

どとは無縁の、成員が自発的に参加する慣行である。しかも、そこでは年長者が尊敬され、若い人々が進んで奉仕する社会である。『ユートピア』では人の誕生については扱われていないが、人々の教育、結婚（結婚前に互いの裸の姿を立会人のもとで見せ合うという注目すべき慣習は、プラトン『法律』にも出て来る。）、老い、死（安楽死の容認）について深い洞察が見られる。

7）幸福とは何かの探求

ユートピアがエウトピア（楽園）という意味をもつことは前述のとおりである。ユートピアでは人々は概して幸福に暮らす。「概して」というのは、すべての人に完全な幸福が約束されるという意味でなく、多くの人々に基本的な生活の安定が保障され安心して暮らせるという意味である。人々の幸福を脅かしたり覆したりする事態は起こりうるのである。また、個人の生活というものも共同体抜きにはありえない、共同体から離れた、あるいは独立した個人の存立は考えられていないのであって、現代の私たちが問題にする「個人の幸福」が主題ではない。にもかかわらず、幸福な生活がどうやったら実現できるかは、ユートピアにおいて最も主要な主題であった。

④モアのユートピアから流れ出すもの

ここでは、モア以後のユートピア諸作品や政治思想に影響を及ぼした特徴を幾つか取り上げておこう。

1）諷刺と批判

モアの親友エラスムスもしばしば採用したこの方法は、問題とされる事象を、ユーモアを交えて笑い飛ばし、読者を煙に巻く。モアでは、戦争に狂奔する君主、逸楽にふける聖職者、権力者に媚びへつらい権勢や名誉に汲々とする貴族や官僚らがその対象となっている。風刺の効いた批判には「おもしろさ」「愉快さ」がある。

2）社会変革への志向

今の社会とは別な全く新しい社会の提示は、今の社会をつくりかえようとする運動を促す。モアのユートピアから、社会変革や革命を志向する動きが出て来る。モアは、貧困問題を解決するため、共産主義や貨幣なき社会を提起した。モア以後、そのような夢の実現をめざした思想や運動が、様々な形で起こってゆく。今の日本でも「改革」がさかんに叫ばれるが、果たして何をどのように変えようというのか？

3）都市設計・社会設計

ユートピアは都市である。都市には人が集まって住み、様々な活動を集約的に行い、文明を進化させる。農産漁村とは異なる人工的環境が形成される。モアのユートピアでは、人々は一定の広さの住居に住む。現代の私たちは、どのような都市、どのような社会を形成するのか、という視点は重要である。

4）空想・夢想・悪夢

ユートピアは架空の国・社会である。ユートピアを考えるには、想像力や構想力が生かされる。そこに「楽しさ」があるが、同時に、夢が反転することもある。夢を実現させようとするとき、その結果が裏目に出ることがある。モアのユートピアでは人々は幸福であるが、「完全な幸福」は「全くの悲惨」に転化してしまう。20世紀における「共産主義の逆説」を私たちは経験してきた。それでも、私たちは素朴で純真な発想を大切にしたい。

5）共同体

モアのユートピアでは、人々は助け合いながら共同生活を営む。今や、共同体からはじき出された人々や、共同体そのものが崩壊しつつある社会では、様々な問題が生じている。ユートピアは現代的視点から読み直すことができる。

6）無あるいは空の世界

ユートピアはその語義からして無あるいは空をふくんでいる。「○○がない世界」である。この否定性は、文明が高度化している現代に

おいてことさら重要である。様々な新しいものを生み出し続けるこの社会が、その限界に達しつつあるという自覚が生じている。価値あると思われているものの存在を仮に否定してみることも必要かもしれない。

7）対話による吟味

モアのユートピアは第一部が対話の形式をとる。たとえば、平等な社会をもたらすための共産主義の提案に対しては、それに対する疑問も提示される。ユートピアには反対意見を許容する懐の深さがある。唯一絶対の指針の提示でなく、代案すなわちオールタナティブの提示が為される。正義の名を借りた狂信は、ユートピアの精神に敵対するものである。

(3)　ユートピアの座標軸

モア以後、数々のユートピア作品が生み出されてきた。ここでは、ユートピア諸作品の位置づけを試みるための座標軸について考えてみたい。三次元空間を想定するなら、原点の座標は（0，0，0）である。

①の1　現実 | 原点 | ～理想

①の2　現実 | 原点 | ～虚構

「現実」とは、今のこの社会であるが、ある視点から捉えられた、問題をはらんだ社会である。「現実」と対置されるのは、なんらかの「理想」すなわち、かくありたい、望ましい社会である。同時に、「理想」として描かれる社会は、「虚構」すなわち、実際にはありえない、存在しない、頭の中で考えられた社会でもある。したがって、「現実」に対置される「理想」と「虚構」は同じ原点を有する二つの異なる座標軸の対極に位置するが、この二本の座標軸は近似的に並行または重なり合う関係にある。

②現在 | 原点 | ～未来

②過去 | 原点 | ～現在

ユートピアはしばしば未来または将来の社会として設定される。それは時間的な彼方にあるものとして描かれる。それは、科学・技術の発展の延長線上に描かれる夢のような社会であったり、逆に、科学・技術がもたらす悲惨な社会であったりする。また、ユートピアは過去のある時点をモデルとして、そこから現在へとつながる時間軸の始点に位置づけられることがある。それは、人類の歴史の起点でありいわば黄金時代と言える。但し、この場合は一つのミュトス（物語）という意味合いが強い。

③ここ（此処）| 原点 | ～かなた（彼方）

地理的・空間的な「かなた」の世界にユートピアを設定するという手法は、モアのユートピアを初めとして多くのユートピア作品で見られる。空間的な隔絶性が、ユートピアの特色を際立たせる。ユートピアとは別に、「ここ」「こちら」に対する「かなた」「あちら」の世界としては、異界、魔界、死後の世界、聖地、天国、極楽、地獄などがある。これは、ユートピアとは異なるが、興味深い世界であろう。

④ | 原点 | ～プラス価値、| 原点 | ～マイナス価値

座標軸の最後に、ユートピアの位置づけについて、価値的なプラス・マイナスの双方があることを指摘しておきたい。ユートピアは元来プラス価値を志向するものであったが、幸福なユートピアが逆転して不幸な、悲惨な逆ユートピア、ディストピアを叙述する場合もある。そもそも、モアのユートピアは幸福な社会であるはずであったが、そこに住む人々は本当に幸福であるのか疑問を生じさせたり、幸福をめざしたのに不幸の極みに陥ってしまったりすることもありうる。というわけで、ユートピアには二つの、全く逆方向の価値づけ、意味づけが存在する。そこからディストピアが発生するのである。

(4)　ユートピアの根本的性格

ユートピアは夢の社会である。人は、今の社会に替わるもう一つの社会を夢想せずには

いられない。なぜなら、人はみずからが生きる社会について、何らかの問題や不満を感じたり見いだしたりせずにはいられないからである。人は「完全な幸福」を求めずにはいられない。ここで言う幸福とは、個人あるいは私人としての幸福というよりは「社会的幸福」、社会の中で生きる人間の幸福という意味である。このような社会的幸福が実現された社会を具体的に描き出した世界がユートピアである。しかしながら、「完全な幸福」とは、言わば私たちの頭の中にだけ存在する幸福であり、決して実際に存在しうるものではない。にもかかわらず、私たちはそのような社会を夢見ずにはいられない。こうして、ユートピアの根底には、夢想であって決して実現しえないという性格がある。求めざるをえないが決して現実に存在しえない、夢想の必然性と実現不可能性というディレンマである。ユートピアは、いわば存在不可能性への問いかけである。

ユートピアは一つのヴィジョン（vision）である。それは、一つの架空の社会であるとともに、これを想像する力である。それはさらに、実際には存在しないものを思い描くという意味で、幻影でもある。

「それでもなお、夢みずにはいられない」のがユートピアであるとするなら、そこで、私たちはユートピアをどのように捉えればよいのだろうか。ここでは二点だけ指摘しておきたい。一つは、ユートピアは、社会改革のきっかけ、より良い社会をつくるための話題・関心・議論を深めるための呼び水となりうる、という点である。より良い社会をつくろうとする思想や運動の起動力としての意味合いである。二つ目には、ユートピアの実現不可能性の確認である。文字どおり完全なユートピアを実現できると考えるのは誤りであり、この誤解にもとづく思想や行動が大きな悲惨を招く可能性もあることを理解しなくてはならない。ユートピアは狂気に傾く可能性をもつ、危険な毒薬である。付言するなら、ユートピアは架空の社会に関わる構想（夢）であるが、これに対して社会改革プランは、現実的な、目標を達成しうる道筋を伴う構想（計画）である。

2．ユートピアへの視座

これまで、ユートピアの原点を探ってきたが、次に、ユートピア作品の数々をどう見るか、あるいは、ユートピア思想そのものをどう見るかについて、入手しうる日本語文献をもとに、先人たちの研究の一端を輪郭づけしてみたい。

(1)　歴史的アプローチ

ここで言う歴史的アプローチとは、ユートピア諸作品を、それが創作された時間的順序にしたがって秩序づけ・特徴づけを加味して叙述する方法である。二つの研究書を取り上げる。

①モートン『イギリス・ユートピア思想』

1952年に出版された本書の原題は『イギリス・ユートピア』であり、モートン（Arthur Leslie Morton　1903～1987）は、イギリスにおけるユートピア作品を中心に、広く欧米におけるユートピア思想の歴史的展開を跡づけた。モートンは本書の冒頭で、「お菓子の国」という、14世紀初めに英語で書かれた一編の詩を取り上げ、貧者の天国、怠け者の天国といった、民衆にとって欲望が充足された世界への憧れから叙述を始めている。次いで、16世紀初めのモアのユートピアに着目し、ヒューマニスト・モア、コミュニスト・モアの両面から、モアの思想が解き明かされる。続いて、モア以後の様々のユートピア思想の展開が考察される。ユートピア思想にとって、革命期のイギリス17世紀は実り豊かな時代であるが、デフォーとスウィフトが現れ18世紀にはどん底に陥っている、とされる。モートンの叙述は19世紀から20世紀前半までに

及び、ユートピア思想の歴史的展開を概観する上で確かな手がかりを提供してくれる。ただし、それは現代から見れば社会主義観の歴史的限界を感じさせる面もあり、労働者階級・社会主義の視点が強いという特徴がある。[8)]

②マンフォード『ユートピアの思想史的省察』

ルイス・マンフォード（Lewis Mumford 1895～1980）は著名な文明史家、技術史家であり、本書は1922年に出版された第一作である。マンフォードはプラトンの『国家』を始めとしてモア、アンドレーエ、ベーコンとカンパネッラ、ハリントン、オーウェン、カベーとベラミー、モリスとハドソンとウェルズ、カントリーハウスとコークタウン、党派的ユートピアなどのユートピアを考察してゆく。ユートピアの歴史を概観するには打って付けの書である。ところで、マンフォードは逃避のユートピアと再建のユートピアを区別する。逃避のユートピアとは、過酷な現実からの隠れ家であり、「困難や抑圧からただちに解放されることを求める」ものである。これに対して、再建のユートピアとは、「人が将来、解放される条件を提出しようという試み」であり、「目的に向かっていく」機能がある。私見では、逃避のユートピアには、現実からの逃避という消極的な機能ばかりでなく、人に束の間の慰めをもたらし、一時的であるにせよ苦痛を和らげる治療的な機能もある。また、再建のユートピアには、社会を構成・再生しようとする創造的な機能があり、壮大な夢を提示する機能がある。なお、思想史家の関曠野の解説によれば、モアのユートピアの意味は、「実現困難な道徳的理想を決して見失うことなく、この世の政治的秩序の漸進的改善のために努力しつづけること」にあり、モアは「現実をわきまえた漸進主義者なのである。」関によれば、「近代世界の大問題は、技術が奉仕すべき理想の都市というユートピア思想を近代人が見失ってしまったこと」であり、「ユートピアンとは力をモラルと理性に置きかえようとする人間」であるという。ユートピア思想を考える上で傾聴すべき見解であろう。[9)]

(2)　理論的・批判的アプローチ

理論的アプローチとは、ユートピア思想を原理的に捉えて分析し、肯定的・否定的評価を加える方法である。二つの論考を取り上げる。

①マンハイム『イデオロギーとユートピア』

カール・マンハイム（Karl Mannheim 1893～1947）はユダヤ系ハンガリー人で、知識社会学の創始者である。『イデオロギーとユートピア』（1929）は三つの部分から成る。第三の「ユートピア的意識」では、「ユートピア的意識とは、まわりの「存在」と一致していない意識である。」という記述から始まり、ユートピア的という語を、現実を超越した方向づけのうち、現存の存在秩序を破壊する働きをもつものと位置づける。また、二つの大きな、存在を超越した観念のグループとして、イデオロギーとユートピアを取り上げ、それぞれについて、また両者の共通性と区別について考察を進める。特にユートピアについては、四つの形態すなわち、（一）再洗礼派の熱狂的至福千年説、（二）自由主義―人道主義の理念、（三）保守主義の理念、（四）社会主義―共産主義のユートピアを順次考察した上で、「現代の状況」として次のように言う。「われわれは、ユートピア的なものがさまざまの形に分裂し、完全に破壊されるような段階にさしかかっている。」現代の意識において、「ますますユートピア的なものとイデオロギー的なものが退潮している」兆候が見られる。ユートピアの消失は「人間自身が物となるような、静的な即物性を成立させ」、「歴史への意志と歴史への展望」が失われる。これは、「考えられるかぎり最大の逆説」となる。[10)]

②ルイ・マラン『ユートピア的なもの』

ルイ・マラン（Louis Marin 1931 ～ 1992）はフランスの哲学者・評論家であり、本書は「空間の戯れ」という副題をもち、1973年に出版された。著者自身が執筆の背景に1968年の「五月事件」があると述べており、高揚した学生運動後の、知のあり方への問い直しの書でもある。本書を特徴づけるなら、モアのユートピア及びユートピアを巡る幾つかのテーマについての記号論的なアプローチということができる。図表を用いながら様々な角度からユートピアに迫るその語り口は、たとえば次のようである。

ユートピアとは一つの言説である。しかし概念の言説ではない。形象の言説であり、言説の特殊な形象的様式である。虚構、作りごと、「擬人化された」話や「具体的な」描写、エキゾチックな小説や表象的な絵図、それらすべての特性のなかに、ユートピアに固有なものがある。ユートピアとは、想像的なものを中核にして作り上げられる、言説の領域の一つなのだ。そしてユートピア的言説のテーゼがいかに強力あるいは厳密であろうと、いかに確信にみちたもの、あるいは理路整然としたものであろうと、それらのテーゼが本来の動きとして概念の域に達することは決してないであろう。ユートピア的言説のテーゼは虚構に包まれ、作りごとの多種多様な衣装を着せられつづけるのである。（訳書15 ～ 16頁から）

マランの多面的なアプローチをたどれば、ユートピアがヨーロッパの思想的伝統にいかに深く根ざしているかを知ることができる。[11]

3．模索するユートピア

ユートピアへの視座が以上のように概括されるなら、20世紀のユートピア（今なお、「現代の」という形容詞を付けることができる）はどのように特徴づけられるであろうか。ここでは、20世紀の主要なユートピア諸作品を二つの視点から展望してみたい。

(1) 閉塞状況におけるユートピア

20世紀のユートピアで特徴的なのは、反ユートピアすなわち裏返しのユートピアである。反ユートピアはディストピアともよばれ、科学・技術の発展や革命・社会改革の先に想定される、逆転したユートピアである。ここでは、二つの作品を取り上げる。

①ジョージ・オーウェル『一九八四年』

ジョージ・オーウェル（George Orwell 1903 ～ 1950）のこの作品は1949年に発表された。オーウェルの『動物農場』（1945年）がユーモアに満ちた風刺的物語であるのに対して、『一九八四年』は完成された全体主義社会を告発する反ユートピア的政治小説と言えるであろう。この小説の舞台は1984年のロンドン。主人公ウィンストン・スミスはオセアニア国の真理省で記録局に勤務する。オセアニアでは最高指導者ビッグ・ブラザーが崇拝されており、どの部屋にもテレ・スクリーンという受信と発信を同時に行う装置が設置され、人々は党が流す映像や音声を常時受けとめ、また、監視されている。情報は党の側から一方的に流され、歴史は党の都合で改竄される。党のスローガンは「戦争は平和なり　自由は隷従なり　無知は力なり」というものである。反革命分子は抹殺され、家族同士の密告も奨励されている。人々の経済生活も統制され、言語も「ニュースピーク」というものに単純化・規格化されつつある。このような生活に疑問を抱いたスミスは、日記を付けるという危険な行為を始めた。やがてスミスはジュリアという女性と恋に落ち、密会を重ねる。二人は党の支配の打倒を企てる組織活動に荷担するが、逮捕され、拷問を受け、公開裁判を経て処刑されることになる。閉塞的な管理された社会を改革する「希望があるとするなら、それはプロール（とよばれる下層階級の人々、筆者注）にある！」とはいえ、変革の展望は明確には示されないままで、この小説の幕を引く。[12]

②オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』

著者のハックスリー（Aldous Leonard Huxley1894～1963）はイギリスの文学者で、本作品は1932年に発表された。原題の“Brave New World”はシェイクスピアの『テンペスト』の中のせりふから取られた。舞台は約六百年後（フォード紀元632年）のイギリスで、人間は人工授精により培養瓶から生まれる。人間はアルファからエプシロンまでの段階に等級づけられ、受精後からそれぞれの等級にふさわしい身体的・精神的役割（指導的立場、その補佐や単純な肉体的作業など）に適合するような調節や教育（睡眠時教育、条件反射錬成など）が為される。人は家庭や母親を知らずに育つ。恋愛は自由で、男女は自分が好きな複数の相手と愛し合うことができ、苦痛を和らげ快感をもたらすソーマという薬物を常時服用する。主人公バーナード・マルクスはアルファ・プラスという上流階級に生まれながら、瓶に誤ってアルコールを注入されたため身体的に劣性で、全体主義的な社会システムへの懐疑心を持っている。マルクスと恋人のレーニナは休暇でアメリカのニュー・メキシコへ行き、「野蛮人（Savage）」のジョンという青年とその母リンダに会い、二人をロンドンへ連れてくる。ジョンは「すばらしい新世界」にふれた後、総統ムスタファ・モンドと会見した折り、芸術・科学・宗教を抑圧する社会システムを批判し、「自由な」生き方を求め、敢えて「不幸になる権利」を要求する。ジョンはシェイクスピアの戯曲をそらんじており、至る所でシェイクスピアの引用を口にする。ジョンは「文明の毒に当たった」と言い、辺鄙な場所にただ一人で暮らすことになるが、周囲やマスコミは彼を追い詰め、ジョンは首をくくる。この悲劇的な結末からは、「すばらしい新世界」からの脱出口あるいは克服の糸口は見えて来ない。しかし、苦痛からの解放を実現したかに見える、管理された未来社会に対して、ハックスリーの懐疑と批判は至る所ににじみ出ている。[13]。

(2) 未来を志向するユートピア

現代のユートピアは、新たな科学の達成に伴って生じた絶望的な状況を描き出したばかりでなく、ペシミズムを克服しようとする可能性、人類がこれまで経験したことがない新たな展望を生み出しつつある。ここでは明るい未来を展望する作品を二つ取り上げる。

①H. G. ウェルズ『解放された世界』

ウェルズ（Herbert George Wells　1866～1946）は『タイム・マシン』『透明人間』などの作品で知られるＳＦ作家であるばかりでなく、文明評論家、平和思想の提唱者でもある。本作品は、1913年に執筆され、翌年発行されたが、ユートピア小説というよりは、訳者の浜野輝の言を借りれば、「現代小説」であり、“戦争と国家という伝統から解放された世界”を追求した作品である。とはいえ、本書が主題とする戦争及び核兵器の廃絶は、国家間の対立や地域紛争・内乱、核兵器の増大や拡散という病弊に悩む現代の私たちにとって人類の生存を左右するともいえる希望であり、課題である。この意味で、この近未来小説をここで取り上げる。この小説は人類の歴史から説きおこされ、原子エネルギーの利用開始、貧困、世界戦争の勃発、何発もの原子爆弾の使用などが記述される。科学者ホルステン、バーネットの回想記、ヒューマニストのルブラン、青年君主エグバート王、“スラヴの狐”チャールズ王、世界政治の指導者カレーニンなどの人物や記録をとおして、世界が統合されてゆくさまが描かれる。本書の山場は、ブリサーゴという牧草地に集まった世界の首脳によって世界統合の宣言が発表される出来事であり、それを妨害する勢力とのせめぎ合いである。カレーニンによって語られる「人間は永遠に夜明けに生きるのです」

という言葉が印象的である。ウェルズが原子エネルギーの兵器への転用とその実用化を予想したのは慧眼であり、原子爆弾の没収と生産禁止まで展望したのは先駆的であった。現代の私たちが何を為すべきか考えさせられる作品である。[14)]

②ジャック・アタリ『反グローバリズム』

アタリ（Jacques Attali）は1943年生まれの経済学者・思想家で、フランス大統領への提言も行っている。序章で、一つのユートピア物語が語られる。2058年に地球を出発した宇宙派遣隊が2106年に帰還したとき、地球世界は世界政府のもとで平和と経済進歩と芸術開花の時期を迎えていた…。アタリは、グローバリゼーション、民主主義、貧困が進展する現代世界を概観した上で、ユートピアの四つの理念として不滅、自由、平等、博愛を取り上げる。アタリによれば、将来のユートピアは博愛のユートピアであり、愛他主義のユートピアである。博愛主義は市場の有害な拡がりに対する防波堤の役目を果たす。なお、本書のフランス語の原題は『（新しいユートピアとしての）博愛』であり、こちらの方が本書の題としてふさわしいようである。アタリのユートピア思想は近著『21世紀の歴史』（原題は『未来の簡略な歴史』）でも形を変えて生かされており、将来社会・近未来社会へのあるべき展望が示されている。[15)]

(3) 伝統に依拠する日本のユートピア

日本における近代以後のユートピア作品は数少ないが、このことをもって、日本人のユートピアへの関心が低いとは必ずしも言えないように思われる。この問題はさておき、ここでは次の二作品を取り上げる。どちらも、日本人の手による、日本人のための、日本的なユートピア作品として代表的なものである。

①井上ひさし『吉里吉里人（きりきりじん）』

1981年に発表されるや話題作となった長編小説である。時代はまさに現代、舞台は仙台北方の東北地方のとある村で、独立宣言をしたその国の名を吉里吉里国という。語り手は「記録係（わたし）」であり、「わたし」が傍観的に事の一部始終を書き綴ってゆく。主人公は古橋健二という売れない作家であり、古橋が取材旅行へ出かける時、たまたま吉里吉里国独立に遭遇する。古橋は異邦人として吉里吉里国の様々な人々と出会い、国のありさまをつぶさに見聞するが、最後は吉里吉里国の大統領に就任するところで、日本国の「陰謀」により殺害され、吉里吉里国はあえなく消滅する。吉里吉里国は医療・福祉の最先端を立国の中心に据えるなど、現実の日本の裏返しの理想国が現出している。作者は東北弁にもとづく吉里吉里語を会話と地の文で多用し、猥雑と感じられるほど様々な話題や技法を駆使している。戦後の日本における代表的なユートピア作品である。[16)]

②原秀雄『日没国物語』

主人公の森平四（もりへいし）は中学3年生で15歳であるが、国境を徒歩で越えて日没国へやって来た。時は1974年、敗戦時に国連によって日本から分離した東北地方は日没国として歩みを進めていた、という設定である。日没国は四つの州（真理州、平和州、平等州、友愛州）から成り、人々は農業本位の落ち着いた生活を送っている。日没国には軍隊も警察もなく、商業は低調で、ヒロシおじさんは、「わたしたちはこの国からカネを永久に追放しようと努力してきたんだよ」と平四に話してくれた。人々は一日五時間労働に従事し、50歳から60歳までは三時間労働でよく、残りの時間は各自「第二の仕事」ができる。日没国根本法は、自然に対する謙抑、人口抑制、欲望の節制という三つの原則から成る。1カ月の滞在の後、平四はこの国のおとなや子どもたちとの親密なつきあいに別れを告げ、帰国すべく国連軍の船へ乗ろうとするところで、物語は終わる。この物語は少年から見た日本版ユートピアであるため、子どもからおとなま

で読みやすく、登場人物はそれぞれ温かで素朴な人柄に描かれている。作者の原秀雄は1922年生まれで、戦後は検事を歴任した。『吉里吉里人』と同じ東北が舞台であるのは偶然の一致かもしれないが、日本人の暮らしぶりの原点を垣間見せてくれ、さわやかな読後感をもたらす好著である。[17]

4．21世紀のユートピアのために

以上で見てきたように、ユートピアは、よりよい社会への夢想という、言わば「人間の本性」から発する問いかけ・構想の叙述である。モアの場合がそうであったように、ユートピアは危機の時代に現れる。時代に生きる人間が主体的に取り組み、乗りこえるべき課題に直面したとき、改革後に到達される社会、または、あるべき社会の原点を、虚構の形で構成し提示したものが、ユートピアである。それは、理性と想像力・構想力との共同の所産である。

ユートピアはよりよい社会への夢想であり、そこに展開されるのは虚構の世界である。モアのユートピアの報告者ヒュトロダエウスの語義が、馬鹿話に熟達した者、大法螺ふきの意であることからも、それは明らかである。同時に、ユートピアは社会変革を志向し、あるべき社会を計画し形成しようとする意図のもとにつくられる。それは、現実社会への深い洞察にもとづく。このような二つの要素・方向性の糸がより合わされたのがユートピアである。そしてまた、ユートピアには風刺・批判の要素が欠かせない。批判を遊びの精神で語る姿勢である。それは、基本的には対話の形式によって語られる。結論づけるなら、「おもしろくてまじめ」、この世にありえない馬鹿馬鹿しさと真摯な社会改革の提案の両面性がユートピアの本質である。

このような特徴をもつユートピアは、近世・近代ヨーロッパの精神的産物であるが、人間の所産という普遍的性格をもつといえるであろう。モア以後、数多くのユートピア作品が生み出され、多くの読者を楽しませ関心を集めてきた。その展開の考察は別稿に譲るが、本稿で見たように、20世紀のユートピアはディストピア・逆ユートピアが読者の関心を集めることが多かった一方で、明るい未来への展望を語るものも見られた。20世紀には、科学・技術の進歩が人類の宇宙への進出や人間そのものの改造を可能にする段階にまで達するとともに、社会主義や全体主義が一時的にせよ世界を席巻するかの勢いを示した。自然と社会における人間の可能性の飛躍的拡大は、ユートピアの創造にどのような影響をもたらしたのであろうか。また、21世紀以後、ユートピアはこれからも作り続けられるであろうか。断言するのはむずかしいが、敢えて言うなら、ユートピアが先に述べた両面性をもつとするなら、長期的には、虚構の文学（物語の世界）と、現実的社会改革構想とへの分化が避けられないかもしれない。物語としてのユートピアは、文学である限り、社会の変化とともに絶えず新たに生み出されるであろう。社会改革構想もまた、時代と社会の変化とともに尽きることはない。モアのユートピアをしのぐ魅力的なユートピア作品が今後生み出される可能性については予見できないが、「理想の社会」への願望と夢想は、いつの世にも尽きることはないであろう。この意味では、時代と社会の危機に直面して、新たな魅力的ユートピアが創造される可能性に期待しても誤りではないであろう。

おわりに

今回取り上げた作品を通して、ユートピアとディストピアの各種の社会像を紹介してきたが、両者の共通点は、第一に「理性の統制」を目標とした社会システム、第二に「安定と秩序」の確立のための個々人の自由活動の犠牲抑圧、第三にその抑圧から必然的に発生する精神的閉塞感である。[18]

私たちが生きる21世紀の世界は、未だユートピアに程遠く、地球環境の保全、基本的生存権の保障、平和と安全の創造、社会福祉とその財源確保などの困難な課題に直面している。情報化・国際化の進展は私たちの生き方を根底から変えようとしている。このような変化の中で、「人間らしい生き方」とは何であるかという問いかけが、普遍的な問いかけとして大きな意味をもつ。普遍性は個別性・特殊性を通じてしか現実化しないとするなら、21世紀の日本のユートピア作品は日本という風土・伝統に根ざしたユートピア文学の形で創造されるであろう。筆者は、日本的なユートピア作品の出現を期待する。現代日本の危うさ、すなわち、すべてがカネで決まるという考え方の蔓延、より多くのカネを手に入れることしか念頭にない風潮、人間どうしのつながりの希薄化、人間のバラバラ化現象、「格差社会」の進行、目先のおもしろさ・楽しさ・「気晴らし」に走る行動パターン、働きすぎによる疲労の蓄積と精神・身体の衰退、未来へ期待喪失による自殺者の増加等々のマイナス要素が、日本社会のもろさと元気のなさの原因をなしている。このような危機に直面する日本で、私たち自身が「自分版ユートピア」を「モノづくり」と併せて作ってみてはどうであろうか。

【主な参考文献】

- トマス・モア『改版　ユートピア』澤田昭夫訳　中公文庫　1993年
- 川端香男里『ユートピアの幻想』　講談社学術文庫　1993年
- A.L. モートン『イギリス・ユートピア思想』上田和夫訳　未来社　1967年
- マンフォード『ユートピアの思想史的省察』月森左知訳　新評論　1997年
- ルイ・マラン『ユートピア的なもの』梶野芳郎訳　法政大学出版局　1995年
- マンハイム『イデオロギーとユートピア』高橋徹・徳永恂訳　中央公論社　1971年
- ジョージ・オーウェル『一九八四年〔新訳版〕』高橋和久訳　ハヤカワepi文庫　2009年
- オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』松村達雄訳　講談社文庫　1974年
- H. G. ウェルズ『解放された世界』浜野輝訳　岩波文庫　1997年
- ジャック・アタリ『反グローバリズム』近藤健彦・瀬藤住彦訳　彩流社　2001年
- 井上ひさし『吉里吉里人』新潮文庫1985年・原秀雄『日没国物語』　新潮文庫　1995年

注　記

1）Daniel　Bremer（M・A.，Zurich）氏は、275種類の人間観を提示している。wohlfahrtswerk.de/downloads/fachtagung/vortrag_bremer.pdf

2）Frank Heynick 著“Language and Its Disturbances in Dreams: The Pioneering Work of Freud and Kraepelin Updated”　の“DREAMS AND LANGUAGE AROUND THE TURN OF THE TWENTIETH CENTURY. の項に Homo Loquens と共に Homo somniens と云う語が使われている。また北見工業大学研究報告8（2）の渡辺祐邦の「洞察された必然性」の Abstract に“　A human being is a creature that can dream. He was and is homo somniens before being homo sapiens.”との説明もある。

3）広辞苑で夢の語義を四つに区分しているが、筆者としては第一は幻想、第二は夢幻第三は迷夢、第四は個人願望、第五は社会・人間理想願望と云う意味での夢に区分したい。

4）この項の叙述は澤田昭夫訳『改版ユートピア』の訳及び訳注に依拠することをお断りしておく。なおTRIVIA LIBRARY・COMによれば“Its original title, incidentally, was Nusquama, from the

Latin for "nowhere."" と記述されている。

5）トマス・モア『ユートピア』平井正穂訳、岩波文庫、1957年、pp.77～99.

6）トモアが『ユートピア』の有名なフレイズ「我が国では羊が人間を喰う（"our country people eat the sheep)」と云う意味は、囲い込み運動の事態を指し、地主が羊を飼い羊毛を刈りその販売のほうが利益を得るため、農地を次々と牧場に替え、農地の大勢の農民が失業するという大衆の貧困問題の発生の事である。ヒューマニストのモアにとっては、この「羊が人間を喰う」という表現は風刺的表現であるが、実はこの現象は資本主義の萌芽を意味する。羊毛を販売し利益を上げた人々が資本家を形成し、牧場増加により農地を追われた農民は都市に進出し労働者に転化したのである。こうした資本と労働力が、後の産業革命の原動力になる。

7）16世紀になり頑強なキャラック船、キャラベル船が盛んに建造された。羅針盤がイスラム経由で伝わり、外洋航海が可能になった。ポルトガルとスペインはイスラム勢力を追うように北アフリカ沿岸に進出した。新たな交易ルートの確保、イスラム勢力の駆逐、強力な権力を持つ王の出現、そして航海技術の発展、海外進出の機会が醸成されたことで、ポルトガル・スペイン両国は競合しながら海に乗り出した。初期の航海では遭難や難破、敵からの襲撃、壊血病や疫病感染等により、乗組員の生還率は20%にも満たないほど危険があった。遠征が成功して新航路が開拓され新領土を獲得するにつれ、海外進出による利益が莫大であることが立証された。健康、不屈の精神、才覚、幸運に恵まれたなら、貧者や下層民も一夜にして王侯貴族に匹敵するほどの富と名声が獲得できた。こうした早い者勝ちの機運が貴賤を問わず人々の競争心を煽り立て、ヨーロッパに航海ブームが吹き荒れるようになった。

8）モートンは以下の4点の思想背景をも解明する。第一に当時台頭しつつあった「新興階級の果てしない楽天主義を反映していた」ヒューマニズムの思想がモアの脳裡にあったこと、第二にプラトンの『国家篇』がモアの理想国家論の出発点であるが、「プラトンの国家論は、多くの奴隷と農奴の労働によって食っている小さな貴族協同体であり、しかもその共産主義は支配層に限られていた」のに対し、「モアのユートピアは、階級のない社会へ一歩を進めていた」点で「プラントンをはるかに越えている」こと、第三にアメリカ・インディアン族の素朴な社会を紹介したヴェスプッチの航海記録（1507年刊）がモアに一つの材料を提供したこと、第四に当時の「ロンドン商人階級の代弁者」であったモアは「民衆を信頼していなかった」のであり、農民叛乱への恐怖を懐いていたこと等である。

モートンによるモアの思想史的位置づけは「『ユートピア』は、一つの里程標であると同時にまた一つの接合点でもある。それは、そこに階級なき社会が具現されかつ計画されている、抑制ある科学的想像力に基づく、偉大な作品の一つであると言える。同時にまた、プラトンの貴族的共産主義や、中世の本能的な原始共産主義〔この言葉でモートンは中世の宗教的神秘的な民衆救済の観念を表している……引用者〕と、十九世紀ないし二十世紀の科学的共産主義とをつなぐきずなでもあろう」という評価である。モアは「近代共産主義」の一源流をなしたが、彼の時代にさえもう一つの流れが、つまりミュンツアーや農民革命の思想があり、後にはイギリスのレベラーズ、フランス革命の左翼思想等々からマルクス主義へと続く別の流れもあったのであり、モアが

そうした思想を理解できなかったのは彼の階級的立場と歴史的条件によるものであるとモートンは説く。(mcg-j.org/step_blog/mobile_archive_18.htm) 参考

9) ルイス・マンフォードはこの作品以降に、「メガ・マシーン」という概念を『機械の神話』1と2(1967年、1970年)で創出した。「巨大機械」と訳せるこの概念は、人工物の機械を意味するのではなく、部品として集合した人間が構成する「組織体」のことである。マンフォードによればメガ・マシーンはピラミッド建設時に構成され、その後、破綻を来たしたが、僅かに存続しながら、中世になり分散型の技術体系と共存し、近代に復活を果たす。人間社会、都市生活はまさに「メガ・マシーン」の組織体なのである。ユートピアもこの概念から捉えなおす視座が必要である。昨今、都市計画を夢見る建築家や、文明史を描く歴史家というパースペクティブな視点からの学者が少なくなり、目の前の経済的合理性を追求する近視眼的な者が増えている。マンフォードは都市計画と文明史も手がける希有な逸材であるが、現在の風潮ではその評価は今後どうなるのだろう。

なお関曠野氏はモアの『ユートピア』作品を、アメリゴ・ヴェスプッチに伴われ南米を探検したポルトガル船員が見た世界がモデルとなる形で書かれているが、フィクションというよりも、『ラテンアメリカ紀行』として読んだ方が適切と指示され、モアの貨幣・商業・私有財産を否定するという斬新なアイデアは、単なる空想ではなく、新大陸世界でも、とりわけ、インカ帝国がモデルとなったと推定され、実際、インカ帝国では各地に生活必需品用の倉庫があり、誰でもその倉庫から必要なものを自由に持って行けたので、餓える者も盗む者も存在しなかったと云う。「各人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取るという社会主義のスローガンは、インカの共同経済倉庫経済をモデルとした」との仮説を、関氏は提示する。以下を参考。(pub.ne.jp/cubaorganic/?entry_id=188658310)

10) マンハイムの知識社会学とは、「人間の思考がいかに社会という外的要因からの作用によって左右され、社会が形成されていくのか、いかにそのなかで個人の認識・思考・行動がなされているのか、という個人と社会の<生きた連関>をいかに問うのか、という学問である。マンハイムによれば<知識社会学における主要命題は、思考の社会的起源が曖昧のままに放置されているかぎり、その的確な理解には達しえない思考様式なるものが存在する>ということである。再度換言すると、<知識社会学>は、ミクロに個人の認識という認識論、心理学のみではなく、その個人の集合をマクロに分析する社会学のみでもない。多様化した社会において個人がいかに行動するのか、という<生きた>、<動的な>社会、個人の連関を研究する学問である。」この視点からのユートピア分析も一つの分析手法であると云える。この書の要点:「イデオロギーとは、支配集団の利害にとらわれたものの見方、換言すれば、ある社会状況をみるときに、都合の悪い部分を捨象して社会の安定性を確保したいという欲望が現れたものである。一方、ユートピアは抑圧された集団の現状否認、つまり、現状認識に願望が入り混じり、そのために現状のある側面を覆い隠すものである。両者に共通する性格として、現状を正しくとらえていない、より正確に表現するならば、現状に対して意識的・無意識的な検閲を加えている、ということが言えるだろう」(www.ksc.kwansei.ac.jp/~kamata/semi/2000/kougi/semi1/000711.htm) 参考

11) Utopiques, Jeux d'espaces, Paris : 1973. マランは副題の「空間の戯れ」の概念により

「ユートピア」の形象全体を、一切中和し宙吊りし「中性的なもの」（マランはユートピアの場を「肯定でもなく否定でもない、真でもなく偽でもないニュートラルな中間項」と定義している）という観点から再考し、モアの作品から、近代黎明の地図、ディズニーランド、イアニス・クセナキス（ルーマニア生まれのギリシャ系フランス人：現代音楽作曲家　1922～2001）までを分析した作品。

12）オーウェルの警告として考えれば、以下のような評価が参考になる。「オーウェルは人工言語がイデオロギーの産物であり唾棄すべきものである事を述べてゐる。人工言語を使はされる事は洗脳と同じである（それを誰も疑はなくなる）事、急進的な革新イデオロギーが過去を否定し断絶を目的とする事を述べてゐる。『1984年』の世界はおぞましいものである。しかし、本書を読む日本人は、皆が皆、他人事だと思つているのではないか。今、本書の「パロディ化」をしてみたが、実は日本の社会は『1984年』のディストピア社会と全く変わらない。「現代かなづかひ」「占領漢字」はオーウェルの言ふ「ニュースピーク」と全く同じ性質のものである。『1984年』の社会に住みたいと読者は思ふか。「嫌だ」と思ふ読者が大多数である事を私は希望する。しかし、「嫌だ」と思ふ読者が皆、既に『1984年』に描かれているのと同じディストピア社会に既に住んでいるのである。私は読者に、斯る現実を自覚して貰ひたいと思ふ。」（members.jcom.home.ne.jp/w3c/kokugo/bunken/1984.html）

13）この作品は明るい未来社会を築くと予感され、止まることを知らぬ機械文明の発達が到達した、人間が自身の尊厳を喪失する恐るべきディストピアの姿を、風刺的文体で描いた文明論的SF小説である。その世界観は以下の通りである。西暦2004年に「九年戦争」という最終戦争が勃発し、終結後、全世界から暴力撲滅の安定至上主義の世界が形成される。そのプロセスで文化人は絶滅し、西暦に代わって自動車王FORDに因んだ「フォード紀元」が採用される。それ以前の歴史は抹殺され総統と呼ばれる10人の統治者によって支配される。人間は受精卵の段階から培養ビンの中で「製造」され「選別」され、階級ごとに体格も知能も決定される。ビンから出た（生誕）後も、睡眠時教育で自らの「階級」と「環境」に全く疑問を懐かぬよう教育され、人々は生活に完全に満足する。不快な気分になれば「ソーマ」という薬で「楽しい気分」になる。したがって人々は激情に駆られず常に安定した精神状態を保つため、社会は完全に安定する。ビンからの生誕なので、家族は無く、結婚は否定されフリーセックスが推奨され、常に人々は一緒に過ごして孤独を感じることは無い。隠し事もなく、嫉妬もなく、誰もが他者の皆のために働く。一瞥すればまさしく「すばらしい世界」でパラダイスに見える。なおT型FORDの大量生産で名を馳せた自動車王フォードを神とし、胸で十字を切るかわりにTの字を切る。（ja.wikipedia.org/wiki/すばらしい新世界）参考

14）「注意して読むとここにはありがちな誤解がいくつかあることに気がつく。一つ、仮に科学に根ざした新しい生活と古い野蛮な生活の対立があったのだとしても、ウェルズの時代にそのような対立に直面していたのはほんの一握りの人でしかなかった。そもそも現在ですら、世界の全ての人々が科学の恩恵を受けた生活をしているとは言いがたく、現にサハラ以南のアフリカなどに目をむければ、きちんと整備された鉄道や安定した電気供給といったものを獲得しようと悪戦苦闘している地域がざらにあるのである。数十年以上前となれば、いうま

でもなかろう。つまるところ、新たな社会を打ち立てられるだけの文明的基礎が全ての国や地域に存するわけではない以上、科学的な理想社会への大移行が起こったとしても、その移行は世界の一部の地域に限られることになる。もしウェルズが言うように＜世界の広大な地域や幅広い階層の人々が、世界の中でも先進の集団と異なる文明段階にいるうちは、世界の真の社会的安定や人類全体の幸福といったものは存在しえない＞ならば、やはり今日の世界においてもなお、本書に描かれたユートピアが実現する見込みはないのである。二つ、世界はあんがいしぶとい。現状の世界がこのまま行けば崩壊するという考えに取り付かれるのは、インテリやアジテーターにとって職業病のようなものだと言ってもいいだろう。というのは、彼らは理念を明確に保持しているために、理想との対比において現実を過度に低く評価してしまいがちになるからである。このような人々の例には事欠かない。例えば、第二次対戦前には、ウェルズのようにこの古びきった社会体制はもう長くないだろうと考えていた者に加え、混血による社会の退廃を嘆く人種差別主義者どもや、共産主義社会への移行を心から信じる共産主義者がいたし、ドイツではちょび髭の元画家が同じような論法で民衆を沸き立たせていた。冷戦期には全面核戦争の恐怖が娯楽小説のテーマとなるほどに浸透し、技術革新によって何度も肩透かしを食らいつつも石油枯渇論は30年以上たったいまでも叫ばれている。そして、現在は地球温暖化に代表される環境問題が世界を揺るがしている。これらの主張が全て、集団的パラノイアに過ぎないと言うつもりは無いが、少なくともウェルズの主張は過度なペシミズムであったと言って差し支えはなかろう。事実、当時の法制度や社会制度は、大規模な改修を何度も受けつつも、本書の執筆から80年以上たった現在まであらかた連綿と続いており、その破綻としての大戦争といったものは??いまのところ??起きてはいない。例えば、予言の一つである国際語をとってみよう。この効率的な統一言語という思想は現在ではほとんど消えうせてしまったが、世界的に見れば言語の数は減少傾向にあると言われている。言語学者によってその予測の幅は大きくことなり、また一般にそれほど確かな予測とは言えないのだが、次の百年で半分になるといった予測も存在する。要するに、これらの傾向が今後数百年続いていけば、いずれ少数の国際語だけが残るのではないだろうか？同じことが農業についても言える。農業の機械化と効率化は、今やその速度を増して進みつつある。もしかしたら、西暦2200年には農業は人間の仕事ではなくなるかもしれない。もちろん、このような変化はウェルズの描くような楽園を約束するわけではない。なぜならば、これらの流れを押し進めているのは主に、人類愛や科学的良識といったものとは無関係な「経済的要求」だからだ。ゆえにこの先にハクスリーの描くような「すばらしき新世界」が待っている可能性も十分にあり、どこに人類が行き着くのかは、結局はその時になってみないとわからない。そしてまさに、その遠い未来の可能性を書いた物の一つとして、本書は現代でもなお、意味を持ち続けているのである。」慶應義塾大学SF研究会の書評は以上である。(web.hc.keio.ac.jp/~fk091865/publications/sample-worldset.html)

15) 原題は“Fraternites UNE NOUVELLE UTOPIE”で「博愛　新ユートピア」である。アタリは、ユートピアは決して荒唐無稽ではなく、グローバリズムとローカリズムの進化した融合融和である「ネオ・グローカリズム」により「博愛」という「真の思い

やりあい」をメンタル・プロトコルとし、世界が全て結合し、各国・各地で「真の幸せ＝各国・各地の最善」が顕在化して新ユートピアが出現するという楽観的な思想を提示した。この思想背景には現代の「グローバル化するＩＴ・インターネットと金融システム」等の反省が色濃く表れている。楽しみな時代だ。「みなでしあわせ。」。なお「博愛」はエベール派（キュジャコバン急進派）に所属し民衆を扇動しその蜂起を主導したAntoine-Francois Momoro（1794年没）によって1790年「自由」「平等」と併せて革命のスローガンとなった概念である。この概念に基づき、従来のユートピア概念を不滅のユートピアから自由のユーピア、平等のユートピアそして博愛のユートピアを提唱するのである。「三つのユートピアは、博愛を通してしか、両立しない。博愛は自由と平等を両立させる。自由は平等と博愛を両立させる。平等は博愛と自由を両立させる。・・・略・・・市場原理をコントロールする理念は、博愛以外にはないんだと、言っているのでしょう」（http://46460707.at.webry.info/200906/article_10.html）参考

16）井上は「吉里吉里人」執筆の動機について「日本人はどうしてコメや憲法のことをちゃんと考えないのか」という疑問があったと振り返った。（www.47news.jp/47topics/e/158877.php）

岩手県内にある人口4187人の小さな町が、100％の食料自給率と世界最高水準の医療技術などを背景に、独立を宣言するという奇想天外な物語。東北地方の一寒村が日本政府に愛想を尽かし、突如「吉里吉里国」を名乗り独立を宣言する。当然日本政府は反発、これを阻止すべく策を講じるが吉里吉里側は食料やエネルギーの自給自足で足元を固め、高度な医学（当時日本で認められていなかった脳死による臓器移植を含む）や独自の金本位制、タックス・ヘイヴンといった切り札を世界各国にアピールすることで存続をはかる。その攻防を含む1日半の出来事を、全28章にわたって描写している。また、独立により国語となった「吉里吉里語」（東北弁、いわゆる「ズーズー弁」）の会話をルビを駆使して表記するほか、作中『吉里吉里語四時間・吉日、日吉辞典つき』という「小冊子」に「三時間目」まで紙幅を割くなど、方言・方言論が重要な役割を占めている作品でもある。舞台の吉里吉里村は、宮城県と岩手県の県境付近の東北本線沿線に位置する架空の村（岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里1は実在するが）に設定されている。（ja.wikipedia.org/wiki/吉里吉里人）参考

17）「東北の一部が日本から分裂して「日没国」という鎖国国家になった、という設定のユートピア物語。著者原秀雄にとって、日没国は紛れもないユートピアだ。一人の生真面目な男性が、一人生真面目に考えたユートピアは、しかし私の目にはディストピアとしか映らない。小さな村を寄せ集めたような政治形態は、私のようなひねくれものが見ても「それはいいかもしれない」と思わせるようなところがあり、その他、教育制度などの細部にかなりの創意工夫が見え、面白いことは面白い。無宗教の葬儀、墓石がわりに植える木、離婚式、公開カルテとでもいうべき「からだの記録」などなどは、実によいアイデアであり、ぜひ日本でも実現していきたい方策である。だが、やっぱり私にとって日没国はディストピアだ。そう思うのは私だけではなかろう。日没国で演奏される歌はイヤになるほど健全で、特に「小人民行進曲」ときたら「むさぼる人は悪いひと」なんて歌詞でうんざりする。そんな歌で教育されてきた日没国民は、みな健全で均一な思想を抱いている。みんなが口を揃えて日本を批判するところなど、ほとんど北朝鮮と変わらない。だか

らこそ、日没国はディストピアなのだ。私は不健全でバラバラな現在の日本の方が、日没国よりも好きである」という意見もネット上にある。(www2u.biglobe.ne.jp/~sasah/reviews/5204.html)

18) 特にこの抑圧犠牲の閉塞感を払拭することこそが理想社会の主たる役割であろう。ユートピアが常にディストピアの様相面を含有するならば、すべての存在の集中管理を理想目標とするユートピア的社会形成ではなく、自由な生産と居住機能が混在し、ファジーな曖昧さを許容し、LOHAS な新たな人間味のある価値観を承認する世界の創案が緊要と思う。